

郷土への扉

The gateway to local history

市内の神社を訪れたとき、地元の人から興味深い話を伺いました。昭和30年代前半までは、病気が治るようにお祈りをする人が数多くお参りをしていただけ、国民健康保険制度が始まってからは、ほとんどなくなつたということでした。病院で治療が受けられ、病気が治るようになり、神様に頼る必要がなくなつたためです。

現在でも病気が治ることを神様に祈る人もいるかもしれませんが、そういった習慣はほとんど見られなくなつていきます。

夏祭りの原点

国分の市街地で行われる夏祭りでは、毎年立派な御輿みこしを見ることが出来ます。その御輿にいろいろな紋もんが描かれていることをご存じでしょうか。よく知られている丸に十字の島津氏の家紋に気づく人は多いでしょうが、他に五瓜ごかに唐花からはな（木



国分夏祭りの御輿



島津氏の家紋



八坂神社の神紋
(五瓜に唐花)



八坂神社の神紋
(左三つ巴)

今年の国分夏祭りは新型コロナウイルスの影響で中止となりました。

疫病を鎮める祈り

瓜うりと左三つ巴ひだりさんずつぱの二つの紋もんがあります。これらは八坂神社の神紋です。国分夏祭りは八坂神社が起源であり、本来は祇園祭ぎおんまつりであつたと考えられます。鹿児島では「おきおんさあ」とも呼ばれます。

全国の八坂神社は、京都の八坂神社が総本社とされ、もともとは祇園社などと称していましたが、明治時代の神道と仏教を区別させた神仏

分離によつて改称されました。祭神はスサノオノミコトで、神仏分離までは牛頭天王ごずてんおうとして祭られました。祇園という名は、牛頭天王が祇園精舎ぎおんしょう（釈迦が説法を行ったインドの場所）の守護神であると考えられていたことに由来します。

国分中央にある八坂神社は、もともと府中にあつた祇園社が移されたもので、商売繁盛を祈願する神社

です。

疫病を司る神

祇園祭や夏祭りの目的の一つは、疫病（流行病）を鎮めることです。祇園社の祭神である牛頭天王は、日本では仏教や神道、民間信仰などさまざまな信仰であがめられてきました。

平安時代には病気を流行させる神として恐れられました。平安時代末期には丁重に祭ると、反対に疫病を鎮めることができると考えられるようになりました。丁重に祭るといふ行為が祇園祭になり、一部が形を変えて夏祭りとして全国の都市部などに広まってきました。

疫病が発生するとされていた7月に、祇園祭は開催されます。その影響からか、7月に夏祭りをするところが多いようです。夏祭りは普段、単に季節の風物詩として捉えられがちですが、祇園祭から派生した夏祭りは、疫病を鎮めるために先人が神に祈つたことから始まつたものです。

いつの時代も、人々は疫病をどうにか抑えようと苦心してきました。昔から残っている習慣には、先人の願いが込められています。

（文責＝坂元）